埼玉大学紀要　教育学部，69(1)：279－303（2020）

徐霞客遊記の基礎的研究（八）

―事類篇・洞（その６）、全行程（その７）―

薄　井　俊　二　　埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：徐霞客、徐弘祖、洞、雲南、鶏足山、滇

１．はじめに

本稿は、明末の地理家である徐霞客の「遊記」について、基礎的な検討を加えるもので、次の二部構成からなる。第１部は、「事類篇･洞（その６）」として、「洞穴」に関する遊記の記述を、「滇遊日記六～十」について検討する。第２部は、「全行程（その７）」として、「滇遊日記六～十」の行程について詳述する[1)]。また「補論」として「徐霞客の鶏足山滞在」を加える。

２．第１部　徐霞客遊記事類篇・洞（その６）：「滇遊日記六～十」

＊補説

・前稿の修正

「徐霞客遊記の基礎的研究（七）」(『埼玉大学紀要（教育学部)』68巻２号において「滇遊日記五の洞穴は、ゼロ箇所と数える」とした。しかし、「滇遊日記五」12月22日条において、鶏足山白石崖付近の石壁にある「洞」へ入洞した記事が存した。そこで「滇遊日記五の洞穴は、１箇所と数える」に修正する。

2-1. 滇遊日記六

遊記の巻七上は、「滇遊日記六」。雲南における崇禎12年（1639）１月１日から、同29日までの記録である。徐霞客54歳。

2-1-1. 洞穴の記述

＊鶏足山の西来寺と万仏閣の間の石壁に洞を確認している：１月２日

・僧たちが馬小屋代わりにしており、入れないのを悔しがる。数えない。

①**南箐[2)]夾崖下の洞**　鶴慶府：１月23日

・象の鼻のように崖が垂れ下がっており、門のような穴があいている。

・門をくぐると、峡が上に延びており、そこを登ると、崖が横列し、あまり深くない洞が数多く口をあける。

・それぞれを僧が殿としており、真武閣や観音龕などがある。

・上下にも様々な洞や空間があり「成異幻」。

②**腰龍洞**　同上：１月23日
・金龍寺の楼の後ろに洞門があり、洞と楼とがともに東を向く、江西の石城洞と同じ。
・洞中は大きく、白衣大士をまつる。
・洞東は累級で架木橋で登る。西は水洞で水を湛える。
・水の深浅は一定ではないが透明度が高く、安寧温泉のよう。
・洞は山の中腹にあるので「腰龍」という。

＊青玄洞　麗江府通安州：１月25日
・有名な洞だが通事が、事情があるので入洞はやめた方がよいというので断念。復路で入洞調査。
→「2-2-1②」

2-1-2. 滇遊日記六のまとめ
　滇遊日記六の洞穴記述は、２箇所と数える。

2-2. 滇遊日記七
　遊記巻七下は「滇遊日記七」。崇禎12年２月１日から、同30日までの記録である。

2-2-1. 洞穴の記述
①**邱塘関南の洞**　麗江府：２月11日
・邱塘関から南に数里の崖。
・探索すると両門があるが「倶不深」。

②**青玄洞**　鶴慶府：２月12日
・洞門に石が垂れ、二門になっている。
・僧が庵を外に結び、洞内には仏座がある。その後ろに石碑があり、詩が刻されている。
・松明を持って探索。

③**香米龍潭の洞**　同
・青玄洞から流れる水が潭をなし、洞が口を開ける。
・崖の樹木がその上に絡みつき「幽趣縈人、不暇他顧」。
・入るに「洞中巨石斜騫」「一洞而水石錯落」。

④**香米龍潭の洞から南西の洞**　同
・連裂三門。対峙し、中は通じず。深さと高さは丈あまり。
・門前に桃花が咲き、「霞痕錦幅の意」あるが、洞が中透していないのが残念。

＊④の腋底にも一洞が見えるが、あまり深くなさそうなのでパス。数えない。
＊剣川州沙溪あたりで「北向きの一洞」を見つけるも、渓流におりるのが難しいためパス。数えない。

2-2-2. 滇遊日記七のまとめ

滇遊日記七の洞穴は、４箇所と数える。

2-3. 滇遊日記八

「遊記」巻八上は「滇遊日記八」。崇禎12年３月１日から、同29日までの記録である。

2-3-1. 洞穴の記述

①**清源洞**　大理府浪穹県：３月３日、同７日

〇３日

・水洞で、北向き。上書「清源洞」三字。

・二人の導者の案内で探訪。詳細な描写。

・内部は複雑で錯綜している。柱があったり分かれていたり「頗覚霊異」。

・石質は白いのだが、入洞者の松明の煤で黒ずんでおり、こすれると衣服が汚れる。

・天井が低いため、入洞して乳を折り取る者が多い（薬にする？）。

・底で水がたまり、粤西洞の仙田のよう（リムストーンプール）。

〇７日

・深くは入らずに、洞周辺の地形を観察、考察。風水的思考。

＊熱水洞　同：３月９日

・峡谷中の危崖に口を開ける。

・土人によれば、これより先の中は広いが口が狭く、水が洞から湧き出ると熱湯のようになり、人が穴に入ると蒸し風呂のようで、どんな病気でもすぐ治る、という。

・入り口が峡谷の底にあるので行けない。数えない。

②**油魚洞**　大理府鄧川州：３月10日

・洱海の北、竜王廟の近く。湖のそばのあな。

・廟の前に大きな穴があり、小魚千万頭がひしめく。漁師が餌をまくと魚どもが群がる。

・底は洱海につながっているが、穴が小さく、大きな魚はこれないのであろう、と。

③**古仏洞**　大理府太和県：３月11日

・点蒼山中。上下二洞。険しい崖にある。

・鍾乳洞で、中垂石や猿のような石痕が見える。

・導者によれば、数年前に僧侶が棲み、仏を安置したのでこの名がある。しかし、僧侶は去り、出入のための階段なども壊れてしまった。

・水がたまったところに、白磁が一つ残されていた。

④**点蒼山西部の石門付近の洞**　大理府蒙化府：３月22日……「２」

〇玉皇閣付近の洞

・点蒼山西部の石門あたりの玉皇閣の下、懸崖の間に口をあける。

・南向き。下は深澗に臨む。両巨石が合掌して形成。

・洞高一丈、下闊丈五。洞形に曲折の致し無く、通明。
・洞前に岩や古木の倒壊などがあり「令人有杳然別天之想」。
○花椒庵の石洞
・薬師寺から少し登ったところ。
・巨石が覆う。上下が丈余離れ、一部はくっついている。
・仏が安置され、洞が楼のよう。北に巨石が隆起し、その下から泉が出ており、お供のよう。
・「亦棲真之地」。
・器物があるが人がいない。山を下り、薬師寺に向かうと、一老人に出会う。「石洞所棲之人」。
・洞に宿泊するのではないらしい。

2-3-2. 滇遊日記八のまとめ
滇遊日記八の洞穴は、５箇所と数える。

2-4. 滇遊日記九
遊記の巻八下は、「滇遊日記九」。雲南における崇禎12年（1639）４月10日から、同29日までの記録である。

2-4-1. 洞穴の記述
①**芭蕉洞**　永昌府保山県：初訪・４月10日……合計「３」
・保山県治より南に下る臥獅窩のあたり。
・獅子の頭のような突崖の下で、その臥臍のあたりに洞が口を開ける。
・洞は東向きで、筆架山と遙かに対する。
・洞内は丈あまり。三丈あまり下ると次第に暗くなる。深さ里ばかりと聞く。
・帰途に松明があれば再訪しよう。
●再訪・５月24日（滇遊日記十）
・松明を持ち、深く入る。
・一柱中懸、覆鐘くらいの大きさ。
・壁に二次生成物がある。土人の言う「二月に石が湿ると、模様が出てくる。『開花』という」。
・大芝菌のような二次生成物。
・この洞は、曲折、底は平らで汚れていない。だから游者も深く入るのを恐れず「令人恍然」。

①２**芭蕉洞付近の洞**：再訪時（滇遊日記十）
・小さな洞があり、入ると「穢気撲人、乃舎之」。
・水洞がある。芭蕉洞の下洞。
・「２」と数える。

＊潞江鎮西の石洞　同　：４月12日
・路傍の崖にあり、土人が山神碑を安置している。数えない。

②**石房洞**　同騰越州：４月27日……「２」
〇ひとつめ
・洞門穹然。半月が上を覆い、鍾乳石が垂れる。
・中はあまり深くなく「無他奇也」。
〇ふたつめ
・洞門南向き。
・「洞前有巨石当門」。「其中夾成曲房」。

③**明光鎮あたりの洞**　同：４月28日……「２」
〇雲岩寺の洞
・洞内に三層の寺院が。神像あり。
・鍾乳石が垂れ、「其状甚奇」。
・さらに一小房（水月）があり、白衣大士を供す。
・もともと洞内に閣があるのは、洞勝を損なうので嫌いだったが、ここはすばらしく、「覚霊通」。
・道人がいないので、ここには泊まれない。
〇上記の洞の南の一門
・鍾乳石が垂れ、高さ広さは三分の一程度。
・中は暗く、水が貯まっている。
・上から水がしたたり、神奇な泉をなす。

2-4-2. 滇遊日記九のまとめ
　滇遊日記九の洞穴記述は、７箇所と数える。

2-5. 滇遊日記十
　遊記の巻九上は、「滇遊日記十」。雲南における崇禎12年（1639）５月１日から、同６月29日までの記録である。

2-5-1. 洞穴の記述

＊芭蕉洞　永昌府保山県：５月24日……ここでは数えない。
→「滇遊日記九」の「４月10日条」に再訪時の記事も記載。

①臥仏寺の洞　永昌府保山県：６月13～14日……「３」
〇臥仏寺付近の洞
・保山城北20里。雲巌山（臥仏巌）の東麓に臥仏寺。門内では、建物が巌山と連続。
・洞の西端に台があり、仏像が横たわる。もともと自然にできたものを、手を加えた。
・13日に行くと、三四生が妓女を呼び、僧侶らと宴会をしていた。
〇内洞
・北の庇の西に内洞があり、護法の山神を祭る。
・喧噪でいやになる。寺に泊。

・14日に内洞に行ってみるが、「無甚奇」で、小さく、「笑此洞之易窮」。
○上洞
・童子が「上洞は行ったか？」という。「異其言」とし、行ってみる。
・縦穴が深い。底は平らで、中は複雑に分かれている。
・「此洞之奇、在南甑穴、層上井口」「一洞而分内外両重、又分上下二重、又南北二重。始覚其奇甚也」。

2-5-2. 滇遊日記十のまとめ
　滇遊日記十の洞穴記述は、３箇所と数える。

３．第２部　徐霞客遊記全行程（その７）：滇遊日記六～十

凡例
・「１．行程」で、徐霞客がたどった行程を、遊記をもとに日を追って同定する。
・地名が全ての資料で同名の場合は、下線を引く。
・一部の資料で同名の場合は、（　）で資料の略号を記す。
・遊記の表記とは異なるが、当該地であろうと推測される地名は〔　〕で示し、資料の略号を記す。
・不詳の場合は〔不詳〕と記す。
・「墟」「鎮」などの行政単位の異同は、同一と見なす。
・「**２．経由地**」で、徐霞客が経由した府県を確認する。明代の府県名で示し、（　）で現代（2014年）の地方行政組織名を記す。重複の場合は〈　〉で示し、現代の組織名は略した。
・「**３．探訪先**」で、山岳などの主な探訪対象を記す。（　）で別称や別表記を示す。
・「**４．まとまった地理記述**」で、ある地域についてまとまった地理記述をしているところを記す。
○「滇遊日記」で参照した地図・書籍とその略称は次の通り。
東亜五十万分一地図（T）[3)]
朱恵栄主編『中華人民共和国地名詞典　雲南省』商務印書館、1994（詞典）
周峻松等主編『雲南省地図冊』中国地図出版社、2006（①）
星球地図出版社編著『雲南省地図集』星球地図出版社、2017（②）
黄珅『新訳徐霞客遊記』三民出版社、2002（新訳）

3-1. 滇遊日記六
3-1-1. 行程
１月
１日　**雲南省大里府賓川州**鶏足山滞在（～22日）→詳細は、**3-6. 補説「徐霞客の鶏足山滞在」**
22日　鶏足山を下り、北へ。騎を勧められたが断り、徒歩。すぐ**鄧川州**域に入る。白沙嘴〔不詳〕、羅武城〔不詳〕、百戸営（T①）、千戸営〔不詳〕、新廠〔①「新荘」、②「新坪」〕を経て、中所屯〔新訳「今小中所」〕に泊。
23日　北へ。すぐ**鶴慶府**域に入る。担夫に荷物を持たせて大道を行かせ、松檜での再会を期して、自らは顧僕と腰龍洞探訪へ。南箐夾崖下に洞の奇勝ありと聞き、探訪。西北へ。南衙（新訳）を経て、腰龍洞へ。探訪。北衙を経て、施茶の亭で飯。そこは熱水橋〔新訳「似為観音橋」、不詳〕だっ

た。七坪〔新訳「又名大営」、②「大営」〕、金井村〔新訳「今名金井壩」〕を経て、松檜〔T詞典①②新訳「松桂」〕に泊。
24日　松檜で飯後出発。北へ峡に入る。波羅荘〔不詳〕、三荘河底村〔②「三荘」〕に至る。周囲の地形地脈を詳述。通事と担夫をその場に残し、顧僕と東南の龍珠山（象眠山）を探索。まもなく通事らと合流。担夫の自宅がある甸尾村〔不詳〕、長康鋪（①）、長康関〔不詳〕を経て、鶴慶府城に入る。城を抜けて北上。大板橋（T）、小板橋〔不詳〕を経て、甸頭村新屯〔詞典①②新訳「辛屯」〕に泊。
25日　北上。馮密村〔T②新訳「逢密」〕を経て、**麗江府通安州**域に入る。青玄洞（詞典）があるが、事情で入れず（麗江よりの復路で探索）。三岔黄泥崗〔不詳〕、七和南村〔詞典「中心村」、①②新訳「七河」〕を経て、邱塘関〔新訳「今名関坡」〕が北山の上にあるのを望む。木家院〔詞典「木家橋」〕、東円里〔不詳〕を経て、三生橋を渡り、通安州城に入り、泊。麗江の木公宅に滞在（～28日）。
26日　小楼で飯。通事の父が「木公があなたを歓待して、便宜を図ってくれる」という。７日分の食料を用意してくれるらしい。
27日　日記を書く。
28日　通事によれば、木公の命令が下り、午後、北へ、解脱林に向かうことになるという（実際には翌日）。
29日　早朝飯。出発。東に象眠山を見ながら北上。十和院〔新訳「今名続和、又作東和」〕、崖脚院（新訳）を経て、解脱林（木公の別荘。福国寺などがある）に着。木公が出迎え、寺僧も主人の意をくんで客を歓待してくれる。

3-1-2. 経由地

雲南省大理府賓川州（雲南省大理白族自治州賓川県）
　同　　鄧川州（　同　　鶴慶県）
　同　鶴慶府　　（　同　）
　同　麗江府通安州（　同　麗江地級市轄区）

3-1-3. 探訪先

賓川州・鄧川州：鶏足山（～１月22日）
鶴慶府：観音山。山は鶴慶府と洱源州との境に南北に延びる。その東麓に、「南箐夾崖下の洞」および「腰龍洞」（１月23日）、龍珠山（同24日）

3-1-4. まとまった地理記述

鶏足山内の地形と脈（１月20日条まで）。

3-2. 滇遊日記七

3-2-1. 行程

２月
１日　麗江の北の解脱林滞在（～11日）。
１日　解脱林の東堂で宴会。銀を贈与される。おおごちそう。許氏が陪席。

２日　木公の住まいである林南浄室へ行き、また宴会。解脱林に戻ると、木公が作らせた「雲薖淡墨」という書籍の序文を求められる。
３日　序文の稿を送ると、珍しい果物が返礼として送られてきた。
４日　鶏足山の僧が、木公に「雲薖淡墨」の写本を送ったことが判明。校正を依頼された。
５日　木公は用事があるとのこと。「雲薖淡墨」の「分門標類」も依頼される。忠甸に「三丈六銅像」を見に行きたいというと「多盗」なのでやめたほうがよいと。「油酥麺餅」を贈られる。巨大で一日一枚も食べられない。
６日　校書。鶩鳥みたいな鶏を贈られる。解脱林周辺の地理をまとめて詳述。
７日　校類分標はほぼ終わる。古岡（一名儺儸）に行くことを希望する。木公もやっと行けたところで、その図が家の壁に書いてある。「神往而思一至」である。
８日　解脱林を出発。山麓へ至る。西北へは忠甸の道だが、東へ崖脚院へ。院のあたりを描写。雪山から下り、中海へ注ぐ川あり。往路とほぼ同じルートで南下。周辺の水系を記述。麗江府治の通事の小楼に荷を解く。木公からの手紙を読み、解脱林での、人物論などの会話を回想。通安州城滞在（～11日）。この年は寅年で、天然痘の流行を人々はおそれ、山中に隠れるものがいた。木公の第二・四子も同じ。第四子が挨拶に来る。木公院で勉強を教えてほしい、と。
９日　木公が校書のお礼をよこし、さらに「鶏山志」の著述を依頼してくる。さらに木家院で第四子に教えてくれと重ねて依頼。土地の習俗などを詳述（ここは人文地理的）。
10日　木家院に行くことになる。道すがら、雪山支脈や水系、周囲の土地を描写。木家院に至る。途中で飛騎に追い越される。木家院に着くと、勉強の準備ができていた。四君（四男）に文章を書かせて添削批評する。勉強後、宴会。「九和から剣川へ行きたい」というと「この道は険しいけれど確かに近い。ただ近年『豆』者がこの地にいるため『死穢之気』が立ちこめており、ゆく人もいない鶴慶の道がよい」と言われる。料理に犛牛の舌がでる。土地ごとの名産を話題にする。象や紅毛野人なども。通事に案内され、東南に進み、村の民家で泊。評価文を眺めながら眠る。
11日　通事に評価文を木家院に送らせる。院で飯するとお昼になった。担夫を雇い通安州城を出発し、南下。邱塘関へ。周辺の地形を詳述。通事に別れ、関を出る。南の崖に洞。七和、七和哨、三岔黄泥崗を経て、**鶴慶府**域に入り、馮密村〔②遭密〕の陳某の家に泊。「青玄洞に行きたい」というと、「明日がいいでしょう。今日は東山へ行きましょう」というので従う。東山の筆架峯などを探訪。
12日　西へ。堆穀峯の下に迫ると、竜王を祭る廟がある。香米龍潭〔不詳〕を経て、青玄洞〔詞典「名勝」、新訳〕探訪。香米龍の洞も探索し、さらにその南西部の連避三門の洞を探訪。南下すると四荘〔新訳「今名士荘」〕に至る。その南腋の下に、龍潭のような潭がある。「更勝香米之景」。古廟があるが無人だった。庇を借りて飯。鶴鳴寺があるというので、探索。西方大士と文昌を祭る庵がある。道者が一人居り、泊まっていけと進められるも、担夫が先行しているとして断る。お茶も断り別れる。庵の南は石寨村〔新訳「今名新華」、①「新華民族旅遊村」、②「新華」〕である。龍泉がある。さらに大路に出て進み、鶴慶府城に泊。鶴慶の山系と水系を著述。
13日　西へ、脈を越える。風水的言辞を用いて、山脈を記述。枯れ峡谷を進む。鶴や獅子が頭を掲げたような岩が並ぶ。南度の大脊かと思われる脈をたどる。汝南哨〔T、新訳「又名新峯」、①「汝南哨東登」、②「新峯」〕に至る。その東南の村落が、土官のいる「虞蠟播箕」である。さらに峡谷を西に進み（**剣川県**域に入る）。南から北へ流れる清水江（①）を渡る。東南の峡谷中に剣川湖〔新訳「剣湖」、①②〕が見える。さらに西へ、山塍塘〔不詳、T「三堂神」？〕に至り泊。州治の10

里手前。
14日　西へ、大渓が北から南へ流れ、湖に注ぐ。剣川州治に至る。楊貢士の家に荷を解く。街の北部に段公を祭る祠がある。楊氏の子を先導に金華山の遊へ。金華山〔詞典名勝、①②「千獅」〕の地名や地形を自注も交えて詳述。桃花塢、万松庵、崖場、何氏書館、玉皇閣、三清閣、玉虚亭、天王石〔新訳「石将軍像」〕を巡る。楊村あたりに温泉がある。石龍寺があるらしいが、晩で暗くなったのでパスする。水寨村を経て州治へ帰る（～16日）。
15日　出発しようと思ったが、楊君が「莽歇嶺は州で一番の名勝だ」というので滞在を延ばすことに。担夫に飯を包ませて先発させ、まず崖場〔新訳「今名巌場」〕に入る。渓流を遡及して登る。まよいながら莽歇嶺へ。山頂で眺めていると木魚の音が聞こえる。探すと、岩肌に「天作高山」の碑文があり、西崖に「白衣大士」、東崖に達磨大師がある。「摩空粘壁而、似非人跡所到也」。さらに玉皇閣に至る。そこで飯をいただき、金華山への道を僧侶に聞く。山頂を極め、四方を俯瞰する。寓居に帰る。
16日　出発。南下。羅尤邑〔不詳〕を経て南下。西から東へ流れる澗を越える。西南に分かれる道がある。これが石宝山道で、大道と分かれる。南に印鶴山を遠望。印鶴山の脈を記述。しばらく進むと石宝山が遠くに見える。駝強村〔不詳〕を経て石宝寺〔新訳「即実相寺」〕山門へ。玉皇閣などを経巡る。
17日　石宝で飯し、下山。南下して沙腿〔新訳「今沙登村」〕、①②沙渓鎮（沙登村）〕に至る。石宝山の主僧に会い、経路についてアドバイスを受ける。さらに四屯〔新訳「今名仕登」〕を経て、東へ。羅木哨〔新訳「今名龍門哨」、①「龍門箐」〕、羅木村を経て、観音山に向かう。（**大理府鄧川州浪穹県**域に入る）。観音鋪村〔不詳〕に泊。
18日　担夫が逃亡していた。浪究県へ向かう。<u>牛街子</u>、熱水塘〔新訳「牛街温泉」〕を経て、（大屯〔T「大庄」、①「大官営」〕に至ると、西南に湖面が広がる（茈碧湖）。湖中に島があり、九気台〔新訳〕が建てられている。浪穹県城に入る。護明寺に荷を解く。何公巣阿を訪ねると、林に連れて行かれて酌す。寺に戻り泊（～30日）。
19日　何君が飯の用意をしてくれる。文廟に移る。何君が船を用意してくれ、同地の士大夫らと茈碧湖で船遊び。
20日　温泉につかり、九気台の遊をなす。
21日　詩の応酬をする。
22日　何君が宴席を設けてくれる。具合が悪かったが、押して参加。
23日　何君の勧めで仏光寨の遊をなす。九気台、大屯を経て、霊光寺へ。泊。
24日　一女関へ向かう。
（日記25日～30日欠）

3-2-2. 経由地

雲南省麗江府通安州	（雲南省麗江地級市轄区）
同　鶴慶府	（　同　大理白族自治州鶴慶県）
同　　剣川州	（　同　　剣川県）
同　大理府鄧川州浪穹県	（　同　　洱源県）

3-2-3. 探訪先
解脱林
馮密東の筆河峯
青玄洞
剣川州：金華山、莽歇嶺、石宝山（石宝寺くらい）
浪究：茈碧湖、一女関、霊王山

3-2-4. まとまった地理記述
解脱林周辺（２月６日条）
麗江北部の水系（２月８日条）
木家院あたりの習俗（２月９日条）
鶴慶の山系と水系（２月12日条）

3-3. 滇遊日記八
3-3-1. 行程
３月
１日　浪究（洱源）から鳳羽方面の遊へ。南下。山関〔不詳〕、悶江門哨〔不詳〕を経由。あたりの村落は、桃花源の趣き。新生邑〔新訳「今名大新生」、①正生村〕を経て、舎上盤〔不詳〕に入る。土の尹姓のものが巡司。
２日　尹の案内で西山を遊覧。
３日　尹の案内で、騎馬で清源洞遊覧へ。馬子哨〔新訳〕、上駟村〔不詳〕を経て清源洞へ。清源洞を探訪。洞外で黄粱を煮てくれた。「仰見天光如洗、四山如城、甚愜（いだく）幽興」。帰路、上駟村の西を経て、鳳羽へ帰り、尹の宅に泊。
４日　尹の案内で、騎馬で西山から北の遊へ。波大邑〔新訳「今名包大邑」、①包大邑〕、鉄甲場〔①鉄甲〕を経る。ここで一洞天をなしているとし、周囲の地形を風水で解説。鉄甲場で飯。ここらあたりのものは緬甸（ミャンマー）に通い慣れており、彝貨（東南アジアの貨物）が多くある。童子が入れてくれたお茶は、臙脂色で無味だった。風雨が強まり、ぬれて帰った。
５日　出発しようとしたが、この日は清明節（お墓参りの節）だったので、尹に引き留められ、土主廟北の新墓で宴。
６日　出発しようとしたが、尹が、舅の呂が来るので待ってくれというので延期。
７日　尹の案内で、騎馬で、舅呂とともに、清源洞再訪へ。白米村（①②）を経て、山麓の騎龍景帝廟（新訳「祭る南詔第十二代王世隆」）に至る。廟の北に泉一穴あり、崖下より湧き出る。「清泉漱其下、古藤絡其上、境甚清幽」。土人の農夫が、我々が騎馬で来たのを「追補者」だと勘違いして鋤を捨てて逃げ去る。「お～い！」と呼びかけるも、ますます早く逃げ去った。清源洞に至る。今回はあまり深くは入らずに、洞前の形勢を観察し、考察する。西山の景勝をあまねく見て帰る。分かれなければと切り出すと呂が懇ろに引き留めてくれる。
８日　呂とともに尹に別れを告げ、浪究に戻る。呂に別れ、楡城（大理古城の別名）での再会を期す。何君は私を待たずに楡城に先発していた。何長君の世話になり、入浴して眠る。
９日　浪究を出発。鳳羽渓を渡り、天馬山（新訳「山上原有鎮蝗塔」、①鎮蝗塔）の麓に至る。山沿いに東へ行き、練城〔新訳「今名煉城」〕を経て、鳳羽河・寧河・大営河が合流する三江口に至

る。そこから峡谷があり、巡検司がある。風雨が強まり、郡志によれば「龍馬洞」があるらしいがパスする。南に下ると、峡谷中に岩が様々に突き出している奇勝に出くわす。「転覚神旺」。崖に小さい穴があり、聞くと「熱水洞」だという。しかし峡谷の底にあるので行けない。さらに進むと下山口（新訳）に至る。**鄧川州**域に入る。中所〔不詳、①②右所か？〕に泊。劉陶石を訪ねる。

10日　飯を終えると担夫が逃亡していた。新たな担夫を雇い、荷物を担いで南下させ、自身は劉の進めて船で湖を下ることに。周囲の水系を描写。はじめは水量も豊かだったが、やがて平らになると川が浅くなる。上陸して徒歩になり、また川に浮かんで下るなどして、西湖に入る。「曲折成趣」「有江南風景」。様々な植物や鳥などがいて「景趣殊勝」。湖がつきると西南に鄧川州治が見える。さらに南下して三条橋に至る。顧僕とはここで待ち合わせていたのにいない。劉君と別れ、ひとり南行。徳源城（新訳）に至る。古跡である（自注あり）。鄧川駅に至る（T他）。駅を過ぎて、ようやく担夫に追いつく。洱海を見下ろす。さらに下ると竜王廟。南崖の下に油魚洞。三家村を経て、**太和県**域に入り、沙坪〔T「沙平」、①「下沙坪」〕へ至り、泊。

11日　担夫を得て、南下。龍首関に至る。ここは点蒼山系北界の第一峯で、楡城（大理古城）の北門鎖鑰にあたる。上関ともいう。点蒼山沿いに南下。波羅村〔①波羅滂〕に至る。顧僕を先に三塔寺へ向かわせ、ひとり西へ進み、山麓の蛺蝶泉〔新訳「原名無底泉、今名蝴蝶泉」、詞典「名勝・蝴蝶泉」〕に向かう。蝶のような花が咲くという話らしいが、季節外れで見ることができない。さらに西へ、古仏洞探索。「観玩既久」してから、東へ戻り、山を下る。周城村へ。洱海と点蒼山との間の地勢を描写しながら大道を南下。二鋪〔不詳〕、頭鋪（T）を経て、三塔寺〔崇聖寺〕に至る。僧侶大空の山房に入る。何巣阿が幼子とともに門で私を待っていた。僧覚宗が酒と飯を出してくれる。夜、巣阿と寺を出て、塔下を徘徊し、座る。「松陰塔影、隠現於雪痕月色之間、令人神思悄然」。泊。（以後、20日まで大理古城中編を探索）

12日　僧覚宗の案内で、何君とともに、騎馬で清碧渓の遊（①②、詞典「名勝・清碧渓三潭」に行く。小紙房〔不詳〕、大紙房（不詳〕、石馬泉（新訳）、一塔寺〔不詳〕、中和・玉局峯（②詞典、の中腹？）を経て、西へ峡谷へ入る。西を望むと、最高峯には雪痕が見える。清碧渓の下流に至る。しばらく行くと、馬では行けなくなり、顧僕に馬を守らせ、徒歩へ。あたりは巨石や緑がすばらしく「幽異殊甚」。登山と周辺の詳細な描写。瀑布が吹き出ていて「如龍破峡」。「相叫奇絶」。やがて何君らはこれ以上登れない、というので、休馬のところへ引き帰えさせ、自身はさらに登る。陽橋（亦曰仙橋）、第二潭、第一潭などを探索。休馬のところへ戻ると、何君らはすでに去っていた。東へ下る。途中で西南に向きを変え、感通寺へ。ここは大雲堂が中心。知人がいて飯を用意してくれた。三塔寺へ戻り、何君の静室で泊。

13日　（崇聖三塔寺の）諸院を探訪。花が咲き、修竹などに、茶樹が交じる。茶について記述。僧が茶を沸かしてくれる。寺の後ろから山を登る。小仏光寨〔不詳〕を経て波羅巌〔不詳〕に至り、鑑賞。戻り、大雲堂を経て、写韻楼（新訳）で楊升菴の遺墨を求めたが、僧が破損を恐れて蔵していた。龍女樹（新訳「又名大理木蘭」伝説あり）がある。東へ、上睦村〔不詳〕、七里橋（①）、二里橋〔不詳〕を経て、大理南城門に入る。呂夢熊の使者に遇うも、暮れてきたので、訪問をしないことに。北門を出て、大空の山房で宿。

14日　石を鑑賞。崇聖寺を探索。

15日　この日から19日まで「観音街子（新訳「今通称『大理三月街』、大規模な市）」。「十三省物無不至、滇中諸彝物亦無不至」。騎馬で何君の墓参りに。石戸村〔不詳〕を過ぎる。労役が苦しく、人が逃亡するらしい。戻り、城内の呂夢熊を訪ねようとしたが、大雨と街子の人混みのために断

念して寺に帰る。
16日　城中に入り、街子をひやかす。「無足観者」（掘り出し物の軸物などを探したよう）。
17日　巣阿と別れる。私が西から帰ったら、一緒に点蒼山の遊をしようと約束。城内に入り、劉陶石らと交わる。宝石・琥珀などを見るが「亦無佳者」。寺に泊。
18日　城内に行き、買い物。呂君らと交わる。
19日　城内に呂君を訪ね、王君父子に会いに行く。家は清真寺の前だった。寺は、板の代わりに蒼石（つまり大理石）を用いている。担夫と手間賃でもめる。寺の僧侶で同行したがっているものがいる。
20日　担夫は馘首にして、同行を寺僧に頼むことに。重い物は覚宗に預け出発。城内に入り、清真寺で石碑上の梅痕を観る。僧僕と南門を出る。五里・七里橋を渡り、感通寺に行く道の入り口を通り過ぎ、上睦村〔不詳〕を経て、陽和鋪に至る。さらに南下して下関（龍尾関）。関の南の大道は、東は趙州（今の鳳儀鎮）へ、西は漾濞へ。石橋を渡り、南西へ。峡谷の中に入ってゆく。天台の石梁のような岩がある。下をのぞき込むと「毛骨俱悚」。さらに西へまた北へ進む。**趙州**域に入り、潭子鋪（新訳「今名塘子鋪」①）に至る。さらに西北へ、核桃箐〔①「大波箐」〕を経て、茅草房〔不詳〕に至る。この日の道路は、役人らの行き来で混雑。四十里橋から五里ばかりだが、橋周辺の宿が塞がっているのを予想し、ここで泊。
21日　早朝に出発。四十里橋（新訳「亦名天威逕」）に至る。亭を伴う木橋だが、亭はなかば毀壊していた。道は渓流沿いで、向かって右手（左岸）は蒙化府（漾濞彝族自治県）で、左手（右岸）は趙州（轄区）。点蒼山の南麓に沿って川を遡及。合江鋪（新訳「今名合江村」、今の平坡鎮か？）に至る。西北に峡谷が裂けている。西北へ進み、**蒙化府**域に入る。亨水橋がかかる。これも亭付きの橋。金牛屯を経て、点蒼山を西から登る。東望すれば景観がすばらしく「令人神躍」。石門傍らの薬師寺の僧、性巖に遇う。薬師寺に止めてもらい、明日案内してもらうことに。しかし、待ちきれず、単独で石門を探索。薬師寺に泊。
22日　点蒼山西部の石門探訪。東へ登る。石門の北崖に出る。玉峯寺廃寺跡、極楽庵廃跡を経て玉皇閣へ。ここで飯を炊く。さらに石門澗水の源である筆架峯を目指そうとするが、僧僕らはついてこれないと。単独で勇を鼓して出発。虎の足跡がある。峯の頂から四方を眺望。周囲の河川を記述。下ると谷から呼ぶ声がする。玉皇閣からしく、こちらも声を掛け合いながら下る。藪の中をようやく閣に下ると、飯はすっかり冷めていた。閣の下の洞を探索。入洞して観察するというよりも、外から全体を眺めて鑑賞。さらに下り、花椒庵の石洞を探索。薬師寺に泊。
23日　性巖のために「玉皇閣募縁疏」を書く。近午、薬師寺を出る。下山し、漾濞駅〔不詳〕、磯頭村〔不詳〕を経て、漾濞街へ。漾濞水を渡る鉄鎖橋と木橋がある。水系を記述。西南へ進み、白木舗〔新訳「今名柏木舗」、不詳〕を経て、捨茶寺で飯。水系を記述。太平鋪〔新訳「諸葛丞相関連」〕の蔽楼に宿。
24日　西へ進むと、峡谷が迫る。路は上へ、渓流は下へと別れる。打牛坪（徐「諸葛丞相過此」、新訳）を経て、勝備村〔不詳〕に至る。勝備江〔新訳「今名勝備河」〕が流れる。渓流を曲がりながら遡及し、黄連堡〔不詳〕へ。ここから**永昌府永平県**域。飯。西に岡脊を越える。観音山の脊である。武侯が過ぎたとき観音を見た、と伝える。西へ進み、白土鋪（T）、松波民哨を経て、万松仙景寺〔新訳「今名万松菴」〕に至る。後ろに松梵閣があり、登ると、東に眺望が開け、「蒼山雪色、与松壑濤声、遠近交映也」。登り路が続き、天頂鋪に至り、泊。
25日　西へ。人影を見ず。梅花哨〔新訳「今名梅花鋪」、②〕に至り、南北に山が開ける。永平

県城に至る。城を抜け、銀龍江沿いに南下し、石洞温泉〔詞典「曲硐温泉」、①〕に行き、浴す。さらに南下し、清真寺、後屯〔不詳〕を経て、門檻村〔不詳〕に至り、泊。
26日　出立し、江の西岸を南へ下る。稲場〔新訳「今名稲田」、①〕を経て、峡谷を進む。旧瀘塘〔新訳「今名瀘塘」、②〕を経て、上廠下廠〔新訳「今名廠街」、T①②〕に至る。ここで飯し、宝台山に向かう。阿牯寨〔新訳①、T「阿掃寨」、②「阿鎖寨」〕［宝台門戸」に至る。慧光寺〔詞典「金光寺」、①〕に入り、泊。
27日　慧光寺で飯し、南へ進んで宝台山探訪。山系の地理詳述。万仏堂、絶頂の湧石塔（石笋）、宝台大寺故址（立地を風水で論じ、少林の少室、霊岩の岱宗と比較）、了凡静室（宝台奥境）などを遊覧。慧光寺の僧翠峯が、「もう一人別の僧と追随します」と言っていたが、万仏堂で四川の僧一葦と合流。ともに山中に入り、四川の僧了凡を訪ねることにしていたのだった。了凡が飯を用意してくれた。飯後、下り、慧光寺で泊。
28日　宝台山を下り、阿牯寨に戻り、さらに西北へ。水系を記述。竹瀝砦〔新訳「今名竹林祠」、①〕を経て、馬鞍嶺〔不詳〕を越える。北行すると、東山の麓に狗街子、西山は阿夷村が見える。沙木河駅〔新訳「今名杉陽街」①②、T「杉木和」とも〕に至る。鳳鳴橋が架かる。橋西で飯。この河は瀾滄江に入る。湾子村〔①「王家荘」？〕で瀾滄江を渡り、**保山県**域に入る。［ここが詞典①②にいう「蘭津渡口」「霽虹橋」か］。瀾滄江を詳述。平坡鋪〔新訳「今名平鋪」〕に泊。
29日　瀾滄江を離れ、西へ上る。［①にいう「古南シルクロード」か？］。山達関〔新訳「今名山大鋪」〕、水寨鋪に至る。
（以下、日記欠落）

3-3-2. 経由地

雲南省大理府浪穹県（雲南省大理白族自治州洱源県）
　同　　鄧川州
　同　　太和県（　同　　轄区）
　同　　趙州
　同　蒙化府　　（　同　　漾濞彝族自治県）
　同　永昌府永平県（　同　　永平県）
　同　　保山県（　同　保山地級市隆陽区）

3-3-3. 探訪先

大理府鄧川州：鳳羽、清源洞
大理府太和県：古仏洞、蛺蝶泉（蝴蝶泉）、崇聖三塔寺、清碧渓、感通寺、波羅巌
蒙化府：点蒼山西部　薬師寺・玉皇閣、石門（関）、筆架峯周辺、玉皇閣付近の洞
永昌府：宝台山、慧光寺

3-3-4. まとまった地理記述

宝台山系（３月27日条）
瀾滄江（３月28日条）

3-4. 滇遊日記九

3-4-1. 行程

４月（１日から９日までの日記は現存しない）

10日　永昌府（保山県）治の南門を出発。南下して石梁を渡る。水は涸れており、おそらくは沙河か。さらに南下して臥獅窩〔新訳「又名雲瑞街」、①②「雲瑞街」〕に至る。芭蕉洞（後名、石花洞）があるというので小路を登って探索する。出洞し、西南に進み、窪底鋪〔不詳〕を経て、冷水箐（新訳）で飯。さらに西へ進み、油革関旧址〔不詳〕を経て、孔雀寺〔不詳〕で茶を振る舞われる。さらに西へ、蒲縹東村を通過して、蒲縹河を呉氏輿梁で渡り、蒲縹西村で宿。

11日　西へ。石子哨〔不詳〕、落馬廠〔新訳「今名馬廠、又称馬街」、②馬街〕を経て、大坂鋪〔①②打坂箐？〕に至る。公館がある。湾子橋〔不詳〕を経て、諸葛孔明に関わる古盤蛇谷を通る。「険之真冠滇南」である。潞江〔怒江〕を渡る。八湾〔詞典「垻湾、明清時建有趣騰越的駅館。名八湾」、T垻湾、①潞江鎮、②潞江鎮（垻湾）〕に泊。潞江駅がある。磨盤石〔不詳〕に登る。

12日　公館が村の北に、その上に潞江駅がある。西へ。深い谷から水音のみが聞こえ、猿やモモンガの鳴き声が昼でも絶えない。崖に石洞があり、土人が山神碑を安置している。「丁」字の道を進む。蒲満哨（新訳、①騰衝県図）を経て、分水関〔新訳「今名城門洞」、①「城門洞」〕に至る。ここから**騰越州**域に入る。新安哨〔不詳〕、太平哨〔①太平鋪烽火台〕、小歇廠〔不詳〕を経て、竹笆鋪〔不詳〕に至る。分水関より降っていた雨がやんだ。鹿肉を売っているものがいたので、買ってあぶって食べる。茶庵を経て山麓に至ると、龍川が北から南に流れている。水は潞江の三分の一。東岸を遡及すると、鉄鎖橋がある。瀾滄江に架かっていたものと同じ仕組みだが、広さは半分程度。ここを渡り、龍関〔不詳〕を経て、橄欖坡〔新訳「今名橄欖寨」、①橄欖寨〕に泊。

13日　西へ、坡を超えるなどして、赤土鋪〔不詳〕、甘露寺（①）、乱箭哨〔不詳〕を経て、嶺哨〔不詳〕で飯。板廠〔不詳〕を経て、芹菜塘（新訳、①）に至る。村に家は少ないが「皆有杜鵑燦爛、血豔奪目」。坡脚村〔不詳〕、雷打田村〔不詳〕、土鍋村〔新訳「今名満金邑」〕、東街〔不詳〕、西交大街〔不詳〕を経て、騰越州城に入り、黔府の館に泊（～16日）。

14日　潘秀才と交わる。

15日　潘秀才と交わる。

16日　保山の地理を詳述。尖山へ向かう。新橋〔不詳〕で、分かれ道。尖山は北だが、まず南の鉄水河方面へ。美しい瀑布（貴州の黄果樹瀑布に匹敵）などを見ながら進む。（のち北に転じる？）龍光台（新訳）であたりの水系を記述。峯に毘盧寺がある。さらに西北へ。擂鼓尖〔不詳〕の西に出て、脊で飯。宝峯山へ向かう。三清殿、虚亭がある。顧僕に荷物を見はらせ、自らは東に下る。玉皇閣、宝峯寺、太極崖などを探訪。虚亭に泊（～18日）。

17日　虚亭。

18日　虚亭でもの書き。先夜、虎が出て、参戎の馬を襲った。参戎は軍士に虎退治を命じたが、捕まえられなかった。騰衝の山系を描写。

（19日～20日、日記なしor欠落）

21日　下山し北上。打鷹山へ向かう。核桃園（新訳②）、長坡〔不詳〕を経て、打鷹山（②）に入る。打鷹開山の僧侶、宝蔵に引き留められ、泊（～22日）。打鷹山詳述。

22日　宝蔵、山系を説明。宝蔵の弟子が道案内で、下山し北上。響水溝（①）、王家壩を経て、馬站に至る。さらに北上し、邱坡〔不詳〕、順江村〔T、②順利〕を経て、順江を渡る。順江街子、鶏茨坪〔新訳「今名基刺平」〕を経て、固棟新街に泊。固棟について記述。

23日　烏寨〔不詳〕まで北上し、西へ転じる。山麓に至る。小川で体を洗う。尖山（雲峯山①②）に登り、めぐる。雲峯寺に泊。
24日　雲峯山の山中探訪。
25日　雲峯山より下る。烏寨まで戻り、北に転じる。熱水塘(新訳)、左所(①②)、後所屯〔不詳〕、松山坡、土主碑を経る。滇灘関への道はふさがっており、茶山野人だけが通行するという。山中の土瓜山の民家に泊。
26日　北へ進む。姉妹山（詞典、国境）を究め、阿幸廠〔新訳「棋盤石①②付近」〕に至る。野人が出没し、危険だという。南へ引き返す。土瓜山を経由し、熱水塘の李老家で泊。
27日　往路とは別路で東南へ向かう。雅烏山村を経て、石房洞探訪。北東へ進み、喇哈寨〔新訳「今名老花寨」〕を経て、南香甸〔新訳「今小辛街」、①小辛街、②明光（小辛街)〕の李老の家に投宿。しかし、石房山でお金を落としたらしく、文無しに。衣服を売り、酒や肉を手に入れる。夜、洞を探訪。南香甸周辺を記述。
28日　東南の界頭へ向かう。東北の大廠を山越えするか、南東の峡谷沿いで陽橋経由か。天気が悪いので、陽橋経由とする。東山に沿って南へ。石洞を探訪しようと考えていたが、前路がわかりにくいので断念。界頭へ。山系を記述。遙かに羅古城を望みながら、瓦甸〔新訳「瓦甸安撫司、今名瓦甸、又名永安」、①②永安〕に泊。
29日　龍江沿いを南へ。上荘〔不詳〕、灰窰廠〔新訳「今名灰窰、又名江南」〕、苦竹岡〔不詳〕、曲石(新訳①②、T「チュウシ」)、酒店(新訳)、下海子〔新訳「下干峨池、又名半月池、今名北海」、①②北海湿地、T「ハイコウ」〕、上海子〔新訳「上干峨池、又名澄鏡池・清海子、今名青海」〕を経て、迎鳳橋を渡り、馬邑村〔新訳「今名螞蟻村」〕を経て、騰越州城に帰る。泊。

3-4-2. 経由地

雲南省永昌府保山県（雲南省保山地級市隆陽区）
　同　　騰越州（　同　　騰衝県）

3-4-3. 探訪先

保山県：芭蕉洞、潞江、磨盤石
騰越州：宝峯山、宝峯寺・玉皇閣
　打鷹山、雲峯山、石房洞

3-4-4. まとまった地理記述

保山の地理（４月16日条）
騰衝の山系（４月18日条）
打鷹山（４月21日条）
固棟（４月22日条）
南香甸あたりの地形（４月27日条）
界頭あたりの山系（４月28日条）

3-5. 滇遊日記十

3-5-1. 行程

5月

1日　騰越州城滞在、交友（～4日）。参府の呉君の招きで参内。

2日　止寓中。

3日　城外の観音寺を訪ねる。南に古刹の玉泉寺・玉泉池がある。泊まるよう誘われるが帰る。

4日　参府が「州志」を贈ってくれた。李君とともに騎馬にて城南の来鳳山の遊へ。綺羅（新訳①）の李君の家に泊まる。騰越の地勢を詳述。

5日　李君の家から東へ。水応寺（新訳「今名水映寺」）、天応寺（新訳）、団山（新訳）、長洞山（新訳「又名馬峯山」）、羅漢冲（新訳）を経て、大洞温泉［八景之一］（詞典「大董街、付近山中有大洞」）に向かう。渓南村〔不詳〕、長洞北麓を過ぎ、大洞の阜を望む。温泉に行きたかったが、李君が帰るのを急いだので、断念。団山の北を通って、綺羅の李君家に泊。

6日　南の楊広哨の遊へ。東へ向かい、水応寺と天応寺の間くらいから南へ転じる。清水屯を経て、馬鹿塘へ向かう。**南甸宣撫司**域に入り、馬鹿塘を探すが見つからない。虎の足跡がある。どうやら鳳田総府荘（新訳）らしき村に泊まるが、村人は漢語を解せず、はっきりしない。東北に二十里で馬鹿塘だというが確たる根拠無し。

7日　東北の馬鹿塘か西北の硫黄塘か。西北を選択し西北へ。**永昌府騰越州**域に入り、楊広哨〔新訳「今名羊官哨」、①徳宏図「羊官哨」〕、陳播箕哨〔不詳〕、竹家寨（新訳）を経て、硫磺塘村〔詞典・泉、新訳「史称熱海、熱田」、①②「熱海」〕に至る。熱海の様子を観察。北へ、半箇山村（新訳）を経て、綺羅の李君の家に帰る。騰越州城に帰る。騰越滞在（～19日）。

8日　雨。李君の家で、書籍を転写。

9日　雨。李君の家で、州志を転写

10日　午後あがったので、李君と騎馬で南遊。南草場〔不詳〕、尚書営（新訳）、芭蕉関（新訳）をめぐり、官店〔新訳「騰越州場内」〕に泊。来鳳山から半箇山の山系を考察。

11日　雨。官店。潘君を訪ねるも不在。

12日　雨。官店。

13日　ぬかるみがひどい。李君と、蘇玄玉のところへ「石」を見に行く。

14～18日　呉参府が路銀を贈与してくれた。彼は私が所有していた「図」をもとめたので、複写してやる。忙しい。

19日　担夫をもとめたら、連日の雨とぬかるみで、「貴甚」。騰越を出発、東へ。雷打田、土主廟を経て、黄坡を目指す。大洞村〔新訳「今名大董」、詞典〕に至り、温泉に浸かる。出発し、黄坡(②)を経て、矣比坡〔新訳「今名玉壁村」〕に泊。

20日　旧路に戻り、芹菜塘、木廠〔不詳〕、永安哨〔不詳〕、甘露寺、赤土鋪を経て、橄欖坡に泊。

21日　龍川を渡る。竹笆鋪、小歇場、太平鋪、新安哨を経て分水関に至る。ここから**保山県**域に入り、蒲満哨を経て、磨盤石（盧姓家）に泊。

22日　東へ、八湾に至る。「人謂、其地暑瘴為甚、無敢置足者」。潞江に至る。流れが急で、往路の倍はある。久しく待ってようやく渡河。澗にかかる橋がある。箐口〔不詳〕である。ここを渡り峡谷に入る。往時に見た盤蛇谷碑に至る。さらに進み、楊柳湾〔不詳〕で飯。打板箐〔不詳〕を経て、落馬廠に泊。まだ午後になったばかりだが、この日は暑く、担夫がへばる。

23日　東へ、石子哨を経て、温泉がある。浸かる。蒲縹東村、孔雀寺を経て、冷水箐に泊。まだ

午後になったばかりだが、今日も担夫がへばる。宿で苦しんでいる人がいた。ここから東へ六里ばかりのところで「盗」に襲われて負傷し、ここに逃げ帰ったのだという。昼過ぎなのに「盗即縦横、可畏也」。

24日　平明に出発。昨日盗賊が出た「坳（窪地）」を無事通過。坳子鋪〔不詳〕を過ぎ、芭蕉洞〔新訳「今名石花洞」〕を探訪（４月10日、往路で探訪したが、松明がなく、再探訪を期していた）。松明を待つ間、担夫が洞口で果実を摘む。覆盆子といい、往時に見たものと色も効用も異なる。洞を詳しく探訪。臥獅窩村を経て、保山県城に至り、会真楼（初出）で泊。

25日　崔君と市場で買い物。

26日　崔君らが石細工職人を連れて来訪。印鑑などを作らせるが、手間賃が石の値段より高くなった。

27日　記録をつける。

28日　石細工職人が作った印鑑などを持ってくる。

29日　閃知願（４月10日条初出）を訪ねるも、辞される。潘蓮華の家を訪ねると、鶏足山の安仁師が来ていた。「万里知己、得之意外、喜甚」。

30日　再び閃知願を訪ねるも、出てこない。どうやら「腹瀉」。九龍泉を見に行く。

永昌府に戻る。滞在、県城探訪（～６月２日）

６月

１日　休憩。

２日　県城の東を小遊。河中村〔①②「河図鎮」？〕、大官廟（新訳、①）、哀牢寺（①）、清水溝（新訳）を経て、沈家荘〔不詳〕に泊。

３日　東へ。閃太史一族の墓がある。風水説により、考察。儸儸寨がある。落水寨（新訳）、山窠村〔不詳〕を経て、小寨〔不詳〕に泊。

４日　そうそうに宿を追い出され、朝食もとらずに出発。保山県城に至り、やっと饅緬を食す。滞在（～13日）。

５～６日　休憩。

７日　閃知願が来訪。

８日　閃知願が再来。

９日　閃太史が馬園の游に誘う。法明寺、龍泉門を経て、馬園に至る。太史が弟の知願と待っており宴会。黄道周の動向を聞く。

10日　馬元中と劉北有が来たらしいが、ちょうど玉細工職人のところに行っており、会えず。帰ってから、馬元中と兪禹錫に会いに行く。禹錫は不在。

11日　禹錫に宴に招かれる。馬元中、閃孩識、孩心らと飲み、臥仏に行く約束をする。

12日　禹錫が路銀を贈与してくれる。宴する。

13日　禹錫に用事ができたとかで、ひとりで北の仏臥寺へ。紙房村〔新訳「今名紙坊」〕、紅廟村（①都市図）、郎義村（新訳、②）を経て、龍王祠（新訳、①「龍王塘公園」）に至る。山に入り、はるかに仏臥寺のある山を望む。山中を遊行し、臥仏寺に至る。洞があるが、妓女を呼んで宴会をしているものがいる。

14日　さらに二つの洞を探索。童子に教えられた上洞は素晴らしかった。東へ、金鶏温泉に向かう。章板村〔不詳〕、板橋街を経て、金鶏村に至る。温泉に入る。宝頂寺〔不詳〕、見龍里〔不詳〕を経て、保全県城に帰る。滞在（～29日）。

15日　休憩。
16日　閃知願に会いに行く。劉北有に会いに行く。かねてより、移ってくるよう誘われていたが、「至是見其幽雅、即許之」。会真楼に帰る。
17日　深夜まで宴会。
18日　宿舎を、劉北有の書館に移す。いろいろと書写。
19日　書館で書写。
20日　書館で書写。
21日　閃孩識が来る。
22日　書館で書写。
23日　閃兪らと宴。
24日　絶糧。
25日　九龍池で遊ぶ。
26～29日　書館で書写。

3-5-2. 経由地

雲南省永昌府騰越州（雲南省保山地級市騰衝県）
　同　南甸宣撫司　（　　徳宏傣族景頗族自治州梁河県）
　同　永昌府騰越州（雲南省保山地級市騰衝県）
　同　　保山県（　同　　隆陽区）

3-5-3. 探訪先

騰越州南部：水応寺、天応寺、長洞山、羅漢冲、楊広哨
保全：芭蕉洞、県城内外の名勝古蹟
　東の名勝・筆架山・閃荘
　北の名勝：龍王洞、仏臥岩・洞・寺、金鶏温泉

3-5-4. まとまった地理記述

騰越地域の地勢（５月４日条）

3-6. 補説「徐霞客の鶏足山滞在」

徐霞客は、崇禎11（1638）年12月22日に鶏足山に登り、翌12（1639）年１月22日までの約１ヶ月間、鶏足山に滞在した。その後、雲南北部の麗江や西部の騰衝を遊行ののち、再び鶏足山に戻るのは、同年８月22日だった。その後の、９月14日までの鶏足山滞在記録が残り、それ以後の遊記は残存しない。

ここでは「補説」として、二度の鶏足山滞在時期の動向を詳述する。

3-6-1. 鶏足山に関する地誌

遊記の記述を補足するものとして、鶏足山に関する地誌があるが、その概要を述べておく。

まず、明錢邦芑（大錯和尚）による『鶏足山志』がある。この書の成書年代は不明だが、彼の手になると思われる「大錯和尚序」には、「万暦28（1600）年に、知人から鶏足山の地誌がない

ことを指摘され、著述を思い立った」という記事があることから、それからほど遠くない時期に書かれたものと推測される。これには「指掌図記」があるとされることから「地図」も附載されていたものと思われる。しかし、この書が刊行された形跡は見られない。

清朝に入り、范承勲がこの書を増修し、康熙31（1692）年に刊行した。これが『雞足山志』全10巻・首１巻である。「中國佛寺史志彙刊」等にリプリントされている[(4)]。この書を参考地誌の一つ目とする（「中国仏寺史志彙刊の頁数を記す。略号「范」）。

なお、大錯和尚と范承勲との間には、徐霞客が著述を構想していた「鶏山志」がある。これは結局構想にとどまり、目録である「鶏足志目」と、簡単な記事を記した「鶏山志略」が残るのみである[(5)]。簡略なものではあるが、遊記の参考地誌の二つ目とする（略号「徐」）。

また、清高爵映（1647～1707）による『鶏足山志』がある。これは康熙42（1703）年の自序があることから、范承勲の増修刊本よりやや遅れる。長らく写本として伝わってきたものを、近人の芮増瑞が校注を施し、2003年に活字版として刊行した[(6)]。これを参考地誌の三つ目とする（刊本の頁数を記す。略号「高」）。

近人のものとして、賓川県地方志編纂委員会弁公室編「鶏足山志：中国佛教名山―鶏足山」がある（略号「新」）[(7)]。これを参考地誌の四つ目とする。

3-6-2. 遊記の記録

（1）鶏足山初訪

「滇遊日記五」

崇禎11（1638）年

12月

22日　江果村で飯し、西北へ。煉洞を経て、龍潭へ。「此鶏山外壑也。登山者至是、以為入山之始焉。」

茶庵を経て、拈花寺（范P273、高P235、新P115「已廃」）で飯。見仏台（辞仏台、范P158、高P111、新P67）を経て、上下しながら「始逼鶏山之麓」。坊があり、牧者が「白石崖（范P130、高P106、新P63）がある」というので、行李を先行させ、自らは崖の探索に。崖があり、その間に「洞」（無名）があり、入洞して探索。西北へ進み、洗心橋（范P374、高P284、新P52）を渡る。北の山肌に「頗盛」な沙址村〔T「沙子街」、①②「鶏足鎮（沙址）」〕がある。「此鶏山之南麓也」。ここからは登りのみ。

霊山一会坊（范P370、高P282、P127）を経て、大覚寺（徐、范P261、高P230、新P107「虚雲禅寺」）を目指す。道を間違え、悉檀寺（范P262、徐、高P231、新P113「已廃、今賓館」）に至る。西竺寺（范P264、徐、高P232、新P116「已廃」）、龍華寺（范P263、徐、高P231）を経て、大覚寺に至り、泊。

23日　大覚寺で飯し、悉檀寺へ。ここは鶏山最東の寺。崖を背負い、前には黒龍潭（范「大龍潭」P217、高P126、新P75）。悉檀寺の弘弁・安仁二師が迎えてくれ、方丈で飯を振る舞われる。宿を移すことを勧められるも、大覚寺の遍周と会う約束をしていたので、待ってもらう。大覚寺へ引き返し、さらに西の寂光寺（范P258、徐、高P229、新P107）へ。住持に茶を振る舞われる。さらに西へ、水月庵（范P290、高P244、新P119「已廃」）、積行庵（同、新P123「已廃」）へ行き、大覚寺に戻り、泊（？）。

24日　遍周に面会する。弘弁らが来て誘うので、悉檀寺に移ることに。静聞の遺骨を持って行く。

飯後、仙陀に会う。悉檀寺に泊。
25日　悉檀寺から北上。無息庵（未記載）・無我庵（范P282、高P240、新P123「已廃」）を経て、大乗庵（范P282、高P241、新P123「已廃」）を過ぎる。あたりを流れる二水を考察。さらに登ると東に幻住庵（范P277、徐、高P238）。ここは今は寧福寺ともいう。さらにいくと天香（幻住庵禅師）の静室がある。不在だった。小沙彌に莘野静室への道を聞く。深翠の中をさらに登る。野愚（寂光寺用周禅師後嗣）の廬がある。莘野の静室に至る。莘野は牟尼山（范P117、高P104、新P61）に行っており、不在。父親の沈翁がいるはずだったが、門が閉ざされ、鍵がかかっていた。左へまわると静室があり、蘭宗（那蘭陀寺静主）が主僧だった。彼と若干の問答。さらに進み影空〔不詳〕の静室に至るも不在。さらに進み野愚の静室（大静室）に入る。野愚、蘭宗、影空、羅漢壁の慧心らがおり、もてなしてくれる。飯後、もたらした書籍を開陳するも、蘭宗だけが興味を示すのみだった。

ついで西の羅漢壁（范P127、高P105、新P63）に向かう。念仏堂（范P337、高270）の下を過ぎ、望台（范P156、高P111、新P66）に至る。ここから下る支脈は大覚寺で結ぶ。以下支脈を記述。北上すれば碧雲寺（范P268、高P233、新P109）。後壁に眞武閣（范P305、高P257）がある。閣の東の「頗幽」なところを探ると、一老僧がおり、師匠だった。「同声相応、同気相求」といわれる。別れて東へ。碧雲寺に至ると慧心がいた。慧心に「悉檀寺は遠いからここに泊まっていけ」と誘われるが、「主寺者」は「夜具がないので難しい」という。ここは標高が高く、寒いようだ。そこで下り、白雲寺（范P268、高P234、新P116「已廃」）を過ぎると夜のとばりが降りてきた。首伝寺（范P266、高P232、新P116「已廃」）を過ぎる頃は真っ暗。寂光寺、大覚寺、西竺寺を過ぎて、悉檀寺に至り、泊。
26日　弘弁が、「今日はお日柄がよいので、静聞師の遺骨を埋葬する場所を探しましょう」と言ってくれる。「龍砂内支」など脈を探り、よい場所を選ぶと、先人の塔がたっている場所だった。そこに静聞を埋葬する。
27日　（欠落あり）北上している。崖を猿のようによじ登る。高いところからあたりを俯瞰して脈を記述。

鶏の足になぞらえる。岐路があり、絶頂道を選ぶ。

根雪がある。金頂寺（范P254、高P228、新P101）、迦葉殿（范P256、高P228、新P104）、天長閣（范P302、高P256、徐「今名多宝楼」）、善雨亭（范P366、高279）を見る。木氏について考察。金頂寺周辺の施設の説明。山中で河南出身の僧と陝西出身の僧とがいがみあっている。多宝楼に泊。
28日　朝起きるととても寒い。日の出を見ようとしたが、すでに上っていた。朝食後、天長閣・善雨亭の碑文を筆写。迦葉殿で飯。北門から出る。捨身崖（范P123「捨身巖」、新P62）へ向かう。東身峡（范P183、高P117、新P70）を下り、小坪を得ると伏虎庵（范P295、高P247、新P123「已廃」）がある。

その西を上ると、礼仏台（范P156、「太子過玄関」（霞客に詩あり）、高P111、新P66）である。絶頂の北につきるところから、下に桃華箐[4]（檀華箐、范P188、高P118、新P70）が見える。東南の崖の中に放光寺（范P264、徐、高P232、新P106）、西に窪地を隔てて香木坪（范P191「木香坪」、高P119、新P68）がある。山中の奇勝を詳しく描写。

八功徳水（范P205、高P124「古跡」P209、新P73）を渡る。

華首門へ（霞客に詩あり、范P123、高P105「定棒金襤」（霊異八景）P169、新P62）。迦葉伝

説にゆかりの場所。天台王十岳（士性）の詩が彫られている。類似する四字句が彫られている。半里で銅仏殿（范P313「銅瓦殿」、范P267「伝灯寺」、銅瓦寺、高p233伝灯寺、新P104）に至る。脈の中に位置づけて地理を考察。寺の後ろが猢猻梯（王士性も記述、范P132、高P106、新P63）。寺の北に袈裟石（范P165、高P113「異跡」P186、新P57）が傑出する。はじめ知らなかったが、僧侶が教えてくれた。紋様は迦葉の袈裟であり、孔は迦葉の錫杖のあとだと。よくわからなかったが、奇勝であることに間違いはない。僧侶が米花を茹でて供してくれた。

猢猻梯をよじ登り、高いところから俯瞰。

下ると仰高亭（范P365、高P279、新P127「已廃」）がある。廃れていたので入らない。さらに下り峡を出ると迦葉寺。これは古い迦葉殿で、頂近くに新しく迦葉殿を建てたので、こちらを迦葉寺という（新訳「袈裟寺」）。尊者にご挨拶する。さらに会灯寺（新譯のみ）がある。東へ行き、聖峯寺（范P259、徐、高P230、新P106「已廃」）に至る。ここから北望すると西来寺（范P267、高P233、新P116）が崖の上に聳えているのが見える。東に行き白雲寺を経て、慧林庵（未記載）を過ぎると、左右の渓流が合流している。東へ進み大覚寺の蔬園を過ぎ、息陰（「軒」、范P280、高P239、新P123「已廃」）の後ろの脈を越える。千仏閣（范P303、高P256）に至ると、前面に集落（市場）が見える。昔は石鐘寺（范P257、徐、高P229、新P109）の前にあったのが、ここに移されたもの。西竺寺を経て悉檀寺に戻る。

晩御飯の後、沈公が来たというので会い懇談する。寺でお風呂を用意してくれ、四長老らとともに入浴する。入浴の仕方を解説。温泉でない入浴はひさしぶり。悉檀寺に泊。

29日　飯ののち、市場で買い物。麺を食したのち、散策。幻住庵を経て、蘭陀寺（徐「那蘭陀寺」、范P266、高P233、新P116「已廃」）に行くと艮一師が迎えてくれた。碑文を写そうとすると、同文の軸物を示される。写すのに時間がかかりそうなので、顧僕に夜具を取りに行かせ、蘭陀寺に泊まることにする。

30日　起きて洗面を済ませると、莘野が来た。ともに飯す。悉檀寺への帰路、莘野楼を訪ねると、泊まっていくように勧められる。承諾する。北楼からのすばらしい眺めを描写する。

「滇遊日記六」

崇禎12（1639）年

１月

１日　獅子林の莘野の静室で新年を迎える。隠空･蘭宗の静室に上り、さらに野愚の静室を過ぎる。野愚はすでに蘭宗のところに降りていた。念仏堂に入る。ここは白雲禅師の住まうところ。禅師は獅子林の開祖。始め泉がなかったが、あるとき白雲が石をえぐると泉が出た。そのことの伝はないが、不思議なことと認識する。周辺の静室をめぐる。莘野楼に泊。

２日　西へ。望台嶺（未記載）を過ぎる。支脈をたどり、その上に庵閣が展開すると関連付ける。風水説の強い認識が見られる。さらに西へ、西来寺に至る。寺の西に万仏閣（未記載）がある。三空の静室で昼食。西へ行くと仰高亭の上に出る。あれこれめぐって莘野楼に戻り、泊。

３日　飯後、荷物を持って悉檀に下ろうとしていたら、蘭宗がやってきて「まだきわめていないところをきわめよう」と誘う。瀑布の裏側から外を眺めたり、珍しい樹木を観察したりする。念誠、義軒、天香らとあう。二水を渡ると大乗庵である。無我・無息庵を過ぎるとその下が小龍潭（范P219、高P126、新P75）と五華庵（范P281、高P240、新P120）だった。南に迎祥寺（范P270、高P234、新P111「祝聖寺」）を過ぎる。東へ行けば、12月26日に龍砂を探ったあたりだっ

た。悉檀寺に入り、泊。
４日　飯後、西へ。迎祥寺、石鐘寺を過ぎ、西来寺の手前で澗を渡って南へ。顧僕が「大士閣の後ろにはなはだ奇な瀑布があるらしい」というので従う。観瀑亭（范P365、高P279、新P127）、大士閣（范P305、徐、高P257、新P122）がある。瀑布は玉龍瀑（新訳。范P215、高P125「玉龍吹霰」（勝概八景）高P136、新P47「飛瀑穿雲」（八景）P74）。天台山の石梁飛瀑になぞらえる。支脈を考察する。大覚寺に遍周老師を訪ねる。ともに瀑布を観て楽しむ。雁宕の小龍湫などとも比較。飯し、碑文を写したのち、別れ、寂光寺へ。碑文を写していたが、日が暮れてきたので、悉檀寺に帰る。
５日　一日中悉檀寺で過ごす。
６日　悉檀四長老と沈君のところへ行き、儀式を行うことを約す。莘野楼に行くと人々が集まっていた。蘭陀寺、幻住庵を過ぎ、悉檀寺に帰り、泊。
７日　大覚寺の遍周がまねくので赴く。復吾師ほか、たくさんの人が集まる。本刹でおときをいただく。寂光寺へ行って碑文を写し終え、大覚寺で飯して悉檀寺に帰る。
８日　四長老、本無塔院（未記載）に行く。山内の支脈と寺院・庵を詳述。静聞を祭る。
９日　西へ、息陰軒へ。これは中支の脊にある。ここらあたりの支脈を論ず。
　伝衣寺（范P261、徐、高P230、新P114「已廃」）に至り、周辺の寺庵を記述。止止庵（未記載）、浄雲庵（范P291、高P245、新P123「已廃」）、弥陀庵（范P292、高P245、新P123「已廃」）、円通庵（范P292、高P245、新P123「已廃」）、八角庵（范P291曇花庵「古名八角庵」、高P245、新P120「已廃」）を経る。伝衣寺に古松がある（新訳「『伝衣古松』は鶏足山十景の一。霞客に「伝衣古松」詩）。
　大士閣のかたわらを通りすぎると、立派な寺院があった。万暦年間に沈公が建てたところで、老僧拙愚が居る。三摩寺（范P271、高P235）に至り、碑文を写していると、一僧が懇ろにあいさつに来る。拙公の徒の虚宇一で、拙公はもうなくなっていて、彼が住持をしているとのことだった。昨日野愚と蘭宗が来て、霞客が来ていることを伝えていたので迎えてくれた。泊まっていくよう誘ってくれる。碑文も長いことから顧僕を帰し、ここに泊。
10日　顧僕が迎えにくる。悉檀寺へ戻ることとする。大覚寺の蔬圃であたりの支脈を詳述。華厳寺（新訳：石鐘・悉檀・大覚・伝衣とあわせて明代鶏足山五大寺。范P260、徐、高P230、新P106）を経て、北へ向かう。毘盧寺（范P304・高P257毘盧閣）、祝国寺（范P268、高P233、新P116「已廃」）、法照寺（法明寺？范P269、高P234、新P116「已廃」）、放光寺を経る。あたりの道や脈を考察（新訳：「放光瑞影」は鶏足山十景の一。霞客に「放光瑞影」の詩）。さらに会灯寺、迦葉寺を経ると、羅李二先生坊（范P367、高P280、新P128）がある。仰高亭、兜率庵（范P296、高P247、新P123「已廃」）、補処庵（范P276、徐、高P238）を過ぎ、悉檀寺に入る。
11日　足の具合が悪いので、外出せず。この地の名産物を記述。
12日　四長老から、九重崖（范P129、高P106「散見諸幽勝」、新P63）に登ろうと誘われる。天気が悪く、午後になる。なんとか登り、悉檀寺に帰り、泊。楊趙州に手紙を書く。
13日　趙州への手紙を顧僕に持たせる。終日東楼で日記を書く。
14日　終日日記を書く。晩に急に咳が出てきた。
15日　具合が悪く、午前は寝てばかり。雲が出て暗いので明かりを求める。
16日　咳が止まらない。暮れにやっと雲が晴れ、月が出た。
17日　東楼で日記を書く。

18日　雲が出ていたがやがて晴れ。顧僕帰る。
19日　快復。東へ。千仏寺（徐「観音閣、為千仏寺」、范P265、高P232、新P116）に至る。その前は昔の街子。水月庵を経て、積行庵に至る。庵主が留めて飯してくれる。
　東に上り、また西北に行くと、烟霞室（克心の徒である本和の庵、未記載）に至る。さらにのぼると克心の静室がある。あたりの龍砂を考察。克心が茶を振る舞ってくれる。さらに登り、水月・寂光。碧雲寺を経て、伝灯寺に泊。
20日　古碑を写そうと思ったが、寒いので、それは下山の時にすることにし、頂を目指す。華首門を過ぎ、下を見ると谷底に放光寺、上を見ると捨身崖の突端が見える。西に一里進み、少し下り八功徳水を通ると曹渓寺（未記載）に至る。
　束身峡、伏虎庵、礼仏庵（未記載）、礼仏台、文殊堂（未記載）を経由。脈を述べ、洞とも関連づける。帰途、麗江からの使者が来ているとの連絡あり。悉檀寺に帰る。
21日　荷造りをし、出発の準備。通事が九重崖の遊覧から帰ってくる。
22日　いよいよ出発。北へ鶏足山を下る。

(2) 鶏足山再訪
「滇遊日記十二」
崇禎12（1639）年
８月
22日　江果村で飯。出発し、西へ。金牛溢井坊、広甸流芳坊、公館街、中谿荘〔不詳〕、煉洞街子（前「煉洞」）、煉方煉龍潭坊、を経て龍潭に至る。村北に巨樹がある。
　茶庵を経て、拈花寺で飯。仏台抑止坊〔不詳〕に至ると「始全見鶏面目」。
　白石崖東麓坊〔不詳〕、白石崖西坊〔不詳〕、牛井街〔不詳〕を過ぎる。騎夫は東転して北上し沙址に向かうが、自分は西に向かい、河子孔（范P206河子孔水、新P73盒子孔水）を究めようとする。洗心橋を渡る。河子孔は橋の南石崖の下にあった。
　霊山一会坊を経て、古刹の接待寺（范P265、高P232、新P116「已廃」）、報恩寺（范P272、高P235、新P116「已廃」）を経て、悉檀寺に入る。支脈を詳述。

「滇遊日記　十三」
同年
８月
23日　悉檀寺滞在。
25日　悉檀寺滞在。弘弁師帰る。
26日　悉檀寺滞在。
27日　蔵経閣を散策。
28日　悉檀寺滞在。体極帰る。
29日　入浴する。久しく瘴地を渉ったせいか発疹ができている。薬がなく苦しむ。

９月
１日　悉檀寺滞在。
２日　悉檀寺北楼で作記。

３日～４日　悉檀寺北楼で作記。
５日　悉檀寺滞在。
６日～７日　僧侶や士人らと交流。
８日　悉檀寺北楼で作記。
９日　大理へ荷物を取り行き、ついでに点蒼山や洱海を探索しようとしたところ、体極が「麗江に使者を出しているので、返事が来るまでここにいた方がよい」というので従うことに。山中の大覚寺に遍周和尚を訪ねることとする。

迎祥寺、石鐘寺、西竺寺、龍華寺を過ぎる。南に中谿に臨んでいるのが万寿寺（万寿庵？、范P285、高P242、新P119）。いずれにも入らないで通過。大覚寺に入り、遍周を訪ねるが、彼は片角荘〔不詳〕に閑居しており、月末にならないと帰らないという。そこで退出し、鎖水閣（未記載）を過ぎる。さらに山中を遊行する。西北に瀑布があり、静廬が臨んでいる。旃檀林（范P138）である。ここで山内の脈を詳述。

東の獅林に行こうとすると、忽ち瀑布が見えた。先に鶏足山に来たときは見なかったものなので、山を分け入って見に行く。ここでも山脈を詳述。

さらに進むと静室を得たので、住持の僧侶に瀑布の所在を問う。東箐、西峡、下塢の三つの瀑布があり、西峡が「第一勝」。ただし春と冬は水が枯れてなくなる、と。前回知らなかったのはそのためか。老僧がお茶を用意するというが、観瀑に急なのでまず出かける。西峡の瀑布を描写。

再び遊行し、野和静室に入る。地勢を竜虎の風水説で評価。野和について記述。

東へ。一宗の静室がある。獅子林の西端。白雲の静室に入る。ここは念仏堂。霊泉がある（「石漏」范P224、「古跡：石漏」高P215、新P74）。

東へ。野愚の静室に入る。ここは大静室。影空の静室で飯。蘭宗の静室を経て、水簾、翠壁の名勝を見る。

蘭宗が誘うので、そこで泊。

10日　蘭宗と飯。詩を四首作り、贈る。顧僕があがってこないので不審に思っていると、悉檀寺から知らせで、顧僕が荷物を持って逃亡した、と。悉檀寺に戻ると果たして逃亡していた。後を追おうという僧侶たちに「やめておきましょう」と。しかし「離郷三載、一主一僕、形影相依」だと思っていたのに、「一旦、棄余於万里之外」なのは「何其忍也！」

11日　私が落ち込んでいるので体極が蔵経楼に誘ってくれる。円通庵の妙行がお茶を振る舞ってくれる。珍しいものなどを見、鶏足山の名の由来などを聞く。

12日　妙行に誘われて、華厳寺に僧野池を訪ねることに。迎祥寺、鎖水閣、息陰軒などを経て華厳へ。その間、支脈を越えたり渉ったりすることを記述。華厳寺はもとは南京の人が建てて南京寺といった。のち火災にあい、野池が再建したが、蔵書は失われた。野池は七十歳。私に「鶏山志」を編纂する意志があると聞くと、録するところの「清涼通伝」を貸してくれた。ひきとめられるも遅くなるのを嫌って下山する。

寺を出る。聖峯寺と燃灯寺（范P269、高P234、新P116「已廃」）の脈の先に天竺寺（未記載）〔不詳〕。王十岳が遊記で「聖峯は中支だ」としているのは誤りだ。支脈を論じる。

迎祥寺、龍泉庵（范P282、高P240）、五華庵を過ぎる。小龍潭がすぐそば。悉檀寺に帰る。

この夜、史君と南龍の龍脈について議論。

13日　史君が九重崖・獅子林・旃檀を経て、羅漢壁で宿する遊行を誘うので、行くことに。天池の静室、止足師の静室、徳充の静室を経て、西来寺で飯。

西来寺の後ろの危巖に洞がある（范P144「鳳眼洞」、高P108、新P65）。あぶなっかしいところをようやくよじ登り、入洞する。水が注ぐなどしており、洞口からの景色がよい。穴は異なっているが、脈は必ず潜通している。

西来寺で喫茶。西へ、一衲軒〔不詳〕。山中の静室をまわり、西来寺で宿。

14日　西来寺で飯。（以下欠）

＊季夢良言う、「12年９月15日以降の記録がない」が、木公の依頼を受けて、志を修していたのだろう。

3-6-3. 鶏足山滞在時の著述の特徴

①脈を記述する際に、龍砂などの風水用語を用いる。さらに静室の立地と脈とを関連づける。この観点は范「鶏足山志」に見られるもの。

②一ヶ月の滞在。人々との交わりの記録が格段に多い。

3-6-4. 鶏足山における洞

「滇遊日記五」

１．白石崖の洞：崇禎11年12月22日条

・入洞して探訪。簡単な記述。

「滇遊日記六」

２．西来寺と万仏閣の間の石壁の洞：同12年１月２日条

・僧たちが馬小屋代わりにしており、入れないのを悔しがる。

「滇遊日記十三」

３．西来寺後崖の洞：同９月13日条

・あぶなっかしいところをようやくよじ登り、入洞する。

・水が注ぐなどしており、洞口からの景色がよい。

・穴は異なっているが、脈は必ず潜通している、とのコメント。

注

１）前稿までは、「徐霞客遊記の基礎的研究」として、この他に「第３部　埼玉大学図書館蔵『徐霞客』関連文献目録稿」を置いた。本稿からは、この第３部を独立した論文とし、「徐霞客遊記の基礎的研究」は２部構成とする。

２）箐、山間大竹林。滇黔一帯多有此稱。亦泛指竹木叢生的山谷。（「漢語大詞典」）

３）いわゆる外邦図。今回参照したのは、「大理」「保山」「順寧」。

４）杜潔祥主編「中國佛寺史志彙刊」（丹青圖書、1985.11）、第３輯第１・２册が「鶏足山志」。

５）これらはいずれも「徐霞客遊記」に附載されている。

６）高爾映著、芮増瑞校注「鷄足山志」（雲南人民出版社、2003.１）。

７）雲南人民出版社、2012.10

以上

（2019年９月29日提出）
（2019年10月10日受理）